



【写真1・鬼太郎列車】

2019.11 Monthly Report

全国のラッピング電車（一部バス）が大集合！ 日本の電化の旗振り役・電車がカワイく変身！

～ラッピングは鉄道生き残りの特効薬になる!?～

☆地方の個性が反映するラッピング電車の魅力

今月のまんすりーリポートは、全国各地で行われているラッピング電車（一部バス）のご紹介をしたい。

ラッピング電車という言葉に厳密な規定はない。ここではボディの外装を広告やカラーリング、イラスト、写真などで飾った電車というほどの意味で使っているが、基本的には単なる広告としてのラッピング電車は除外した。さらに今回のまんすりーリポートでは、アートとしても優れていて、同時に公共交通にラッピングを施すことにより、何らかの公共的なメッセージが込められているような、そんな基準でラッピング電車をセレクトしてみた。

*



【写真2・鬼太郎列車】

近代以降、日本の《電化》は多岐に渡って進められてきた。そのなかでも明治30年代に始まった路面電車＝電気鉄道の普及は、工業化（各種工場の立地）の進捗とともに日本の電化を大いに進めた。

ご承知のように近代化の初期、わが国には電化の急速な発展（需要増）をまかなうだけの公共の発電所設備がなく、有力な紡績業者や鉄道会社などが自前の発電所を私的に建設するのが主流だった。

かくして路面電車の敷設が明治30年代から盛んに行われるようになり、日本の公共交通網の先駆けになるとともに、電化の推進役の一端を担ったのだ。

電車が中心の鉄道関連の各種事業においては、現在も電気設備工事会社の担う役割が大きい。鉄道事業は今も数多くのエレクトリシャン（電気技術者）が支えている。

しかし、自動車交通網の発展や人口バランスなど、多岐に渡る要素の兼ね合いで、鉄道交通は今、いろいろな意味で新時代に入ろうとしている。付随して地方ではすでに、電車路線網やバス路線網が急速に淘汰され始めてもいる。

そうした大きな時代のうねりが一方であるだけに、ラッピング電車（一部バス）の存在は、都市交通の要としての電車やバスが、少なくとも現時点ではいかに我々に身近で、なおかつ愛されているかを物語る「動く証拠」として君臨しているようにも思われる。

*本文、後略